

## カール・シュミット『政治的なものの概念』の概要

### 1

国家という概念は、政治的なものという概念を前提としている。一般に、「政治的」とは、何らかの意味で、「国家的」と同一視され、あるいは少なくとも国家に関連付けられる。これに反し、国家と社会とが浸透しあうのに応じて、国家的＝政治的という等置は正しさを失い、誤った方向に導くものとなる。あらゆることが、少なくとも可能性としては、政治的なものであり、国家を引きあいに出すことではもはや、「政治的なもの」の特殊な区別指標を基礎づけることが不可能となるのである。

### 2

道徳的なものの領域においては、究極的区別とは、善と悪とであり、美的なものにおいては美と醜、経済的なものにおいては利と害、たとえば採算が取れる、取れない、であるとしよう。政治的な行動や動機の基因と考えられる、特殊政治的な区別とは、友と敵という区別である。敵とは、他者・異質者にほかならず、極端な場合には、敵との衝突が起こり得る。道徳的に善であり、審美的に美であり、経済的に益である者が、それだけで政治的な意味での友とはならないのである。

### 3

諸国民は、友・敵の対立にしたがって結束するのであり、この対立は、今日なお、現実に存在するし、また政治的に存在するすべての国民にとって現実的可能性として与えられているものである。したがって、敵とは、競争相手とか相手一般ではない。また反感を抱き、憎んでいる私的な相手でもない。敵とは、抗争している人間の総体なのである。敵とは、公敵であって、私仇ではない。究極的な政治的手段としての戦争は、すべての政治的概念の基礎に、この友・敵区別の可能性が存在することを露呈するものである。

### 4

政治的単位とは、必然的に、友・敵結束にとって決定的な単位なのであって、主権をもつ単位なのである。多元的国家理論は、統一的中心がなく、その思考上の契機を、実に様々な観念領域(宗教・経済・自由主義・社会主義等々)から得ており、あらゆる国家論の中心概念、すなわち政治的なものを無視し、諸団体という多元論から連合的に構成された政治的単位へと行きつく可能性をすら論じていない。

## 5

本質的に政治的な単位としての国家には、交戦権がある。すなわち、現実の事態の中で、自らの決定によって敵を定め、それと戦う現実的可能性である。一国民が、あらゆる政治的決定を放棄することによって、人類の純道徳的ないし純経済的な状態を招来することなどはあり得ないのである。一国民が、政治的なものの領域に踏みとどまる力ないしは意志を失うことによって、政治的なものが、この世から消え失せるわけではない。ただ、意気地のない一国民が消え失せるだけに過ぎないのである。

## 6

政治的単位は、本質上、全人類・全地球を包括する単位という意味での単一的なものではありえない。人類そのものは戦争をなしえない。ジュネーブの国際連盟は、それが国家を解消させないと同様に、戦争の可能性を解消はしない。それは、戦争の新たな可能性を導入し、戦争を許容し、連合しての戦争を促進し、かつそれが一定の戦争を合法化し是認することによって、戦争に対する一連の歯止めを除去するのである。「世界国家」が、全地球・全人類を包括する場合には、それは政治的単位ではなく、単に慣用上から国家と呼ばれるに過ぎない。

## 7

自由主義が作り出したのは、「権力」の配分と均衡の理論、すなわち国家の抑制・制御の体系であって、これは、国家理論とか政治的構成原理とか呼ぶことのできないものである。真の政治理論とは、すべて、人間を「悪なるもの」と前提する、「危険な」かつ動的な存在として見做すものである。政治的思考及び政治的本能は、理論的にも実際的にも、友・敵を区別する能力によって実証される。重大な政治のクライマックスは同時に、敵が具体的な明瞭さで敵として認識される時点なのである。

## 8

経済的権力地位の維持ないし拡張のために行われる戦争は、宣伝の力で「十字軍」とされ、「人類の最終戦争」に仕立てられざるを得ない。倫理・経済の両極性が、これを要求するのである。この両極性には、確かに驚くほどの体系性・一貫性が見られはするが、このいわゆる非政治的な、されには一見反政治的でさえある体系は、既成の友・敵結束に奉仕するか、さもなければ新たな友・敵結束に行きつくものなのであって、政治的なものの帰結から逃れることなど不可能なのである。